2隻の遠洋マグロはえ縄漁船が焼津港から出漁!

三崎支部が担当する住吉漁業株式会社のグループ会社である三崎漁業株式会社の遠洋マグロはえ縄漁船「第十一住吉丸」と、同じくグループ会社の南洋水産株式会社の「第八東栄丸」が、6月10日と11日に、それぞれ静岡県焼津港から出港し北大西洋のマグロ漁場に向かった。

日本の主要なマグロ漁港といえば、神奈川県三浦市の三崎漁港、静岡県の焼津漁港と清水漁港で、この3つの港が遠洋マグロ漁業の基地港として昭和42年頃まで賑わった。しかし現在は、遠洋マグロはえ縄漁船が大型化し、冷凍マグロの受け入れ設備や、運搬流通網の変遷によって、三崎港での水揚げ量が減少するとともに、漁船の出入港数も減少し、三浦市三崎を拠点とする遠洋漁船も、焼津漁港から出港するケースが増えている。

また、日本一のマグロの水揚高を誇る焼津漁港は、静岡県の中央に位置し、関東と関西を結ぶ東海道のほぼ中央という、交通アクセスにおいて好条件な漁港で、日本一の水産県を自負する静岡県の中核として役割を果たしている。

第十一住吉丸と第八東栄丸の出港前に、両船を担当する三崎支部が訪船を行い、最近の組合活動と令和 7 年度労働協約改定妥結内容を報告し、組合員と意見交換を行った。そして出港時になると、岸壁で見送る家族や関係者から、安全航海と大漁を祈念するエールが送られ、両船とも汽笛で応え、舵を大海原に向けた。

焼津漁業資料館を訪ねて

JR焼津駅から徒歩5分ほどのところに、遠洋漁業の基地、焼津港がある。ここ焼津の漁業は、江戸時代から相当な規模で漁業が営まれてきたことが、幾多の文献で知られている。この先人の活躍で荒浜から焼津港まで成長してきた過程を後世に残すべく、焼津漁業協同組合が創立三十周年を記念して焼津漁業資料館を開館した。資料館は、1階と2階に分けられた展示室の構成で、1階には鰹船ブリッジに代表されるように、主に実際に使用していた漁船、漁具が展示され、2階は昔と現在の焼津港の写真パネルや古文書などの古い文献、漁民の衣服や航海計器などが展示され、日本の遠洋漁業の技術を後世に伝承している。

「海員だより」